

高

度成長が進むにつれ、全国主要都市の中心部には住宅が不足するようになった。中心から放射状に延びた地域に、ベッドタウンが開発されていく。

茨城県取手市も例外ではない。東京都心に通勤する勤労者が、住宅を求めて取手に流入する。取手が70年10月に市に昇格したころ、人口は4万人に増えていた。人口増加に特に寄与したのが、69年4月に完成した日本住宅公団の取手井野団地である。約2200戸、7千人あまりの住民が、一挙に取手に流れ込んだ。それ以後も、取手市の人口は二桁の伸びを記録し続ける。しかし、95年の11万8千人をピークに減少に転じていく。

◆アートと団地の出会い

住民の流出に危機感を募らせた取手市は、市の活性化のため、東京藝術大学に協力を求めた。藝大は91年10月から取手にキャンパスを置き、99年4月には、取手で全課程を履修する「先端芸術表現

日常にアートがある団地

茨城・取手井野団地(1969年・昭和44)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

変わる日本の「暮らし」と「まち」



「科」を新設していた。藝大教授の熊倉純子さんによると、行政と大卒だけでは地域に根付かないと判断、まちづくりに関心を持つ市民グループを巻き込むことになった。

その市民は、高度成長期に取手に移り住み、今は引退した70代前後の世代である。熊倉教授は彼らを「茨城都民」と呼ぶ。当時、意識は東京に向き、寝るためだけに取手に帰る人たちのことである。

「彼らは高学歴で教養を持っていて。現役の頃、地域社会に貢献してこなかった負い目があり、新しい価値を生み出すことにも積極的に。彼らの夫人も含め、社会活動に対する好奇心が強いですね」

99年、三者が共同で企画・運営するプロジェクトが開始した。これが取手アートプロジェクト(TAP)である。TAPは「芸術のまちを目指す取手市をフィールドにアーティストの活動支援、市民への芸術体験機会の提供を目的として」(TAPリーフレットより)活動する団体だ。市内在住のアー

ティストのアトリエを公開するオープンスタジオ、テーマを決める全国から作品を募集し屋外に展示する公募展を隔年で開催する。

当初、公募展は市内の遊休施設で開催されていた。いつしか日常生活が営まれる場所で非日常のアート活動をすることで、新しいものが生まれるかもしれないという機運が高まった。舞台に選ばれたのが取手井野団地だ。2008年に開催された公募展のキャッチフレーズは「取手井野団地・電気・ガス・水道・アート完備」だった。

その前年、団地には井野アーティストヴィレッジが設置されていた。学生のアトリエを必要としていた藝大が、URの協力を得て空き店舗となっていた取手井野団地のショップングセンターを共同アトリエに改装した。そこから、団地とTAPの出会いが生まれた。

◆アートが新たな交流を生む

08年の公募展では、団地の施設や空き部屋が使われた。子ども用

をはじめ、住民の方がアーティストの制作に自発的に関わることがなりましたね」

羽原さんは、アーティストは人の面白いところを引き出すのがうまいという。そこから発展した企画が「とくいの銀行」だ。風呂敷の包み方やパン作りなど、住民が自分の得意なことを登録する。関心を持った別の住民が望めば、みんなの前で自分の「とくい」を披露する。これが、住民の新たなつながりを生み出している。

11年には、団地の一角に「いいーの+Tapping」という名のお休み処もできた。そこはアーティストの拠点であり、団地住民の集いの場でもある。ここに通う70代後半の女性はこう話す。

「今まではほとんど家から出なかつたけど、アートが来てから部屋から出るようになったのよ。今日は何かやっているかしらって」

羽原さんはこうも言う。「小学生が子どもだけで来てアーティストと交流したり、親じやな

い人から優しくされたり怒られたりしているんです。アーティストと住民が、それぞれ新たな交流を育む場になっていきますね」

熊倉教授は、このプロジェクトを30年は続けたいと話す。「幸福はお金を出して買うものではなく、日々の暮らしでどれだけ

の刺激があるかということ。文化的な刺激があれば、そこで子どもを育てたくなるし、老後を送りたいと思うはず。そんなまちになれ

ばいいですね」

今あるものを生かしながら、新しく快適な暮らしを実現する仕掛けを作りたい。URの目指すこの方向は、熊倉教授の考えとそう遠くない。TAPが提案

する斬新なアイデアによって、取手井野団地は日常にアートのある団地

としてさらに注目を集めるはずだ。

のプールを足湯にしたり、住民に協力を得て一斉に布団を干してもらったり、団地の一室で最大何人が暮らせるかという実験を行ったり……。展示されたアートに対する反応は上々だったが、そのときはまだ、住民にアートがそれほど浸透したわけではなかった。

この公募展で、アーティストは団地という日常にアートという非日常を持ち込むことに強い関心を持った。さまざまな人が暮らす団地は社会の縮図。そこで創作活動をするのは意義深いとTAPは考えた。2年後、取手井野団地を舞台にした「アートのある団地」プ

プロジェクトが始まった。プロジェクトが3年目を迎えている。団地住民に変化が見え始めている。アートを高尚なものだと思いついていた住民は、ハードルの低い身近なものとして捉えるようになった。形あるものだけでなく、公募展で行われた足湯や布団干しのような行動そのものもアートだということを理解した。今では、アーティストが何をしても住民は驚かなくなっている。

さらに「私のやっていることもアート？」という意識になり、自

ら口や手を出すようになる。10年

にNPO法人となった取手アート

プロジェクトオフィスの事務局

長・羽原康恵さんはこう語る。「アーティストに触発され、ご自分のスキルを提供してください。元エンジニアの方



アートが人と人を結ぶ取手井野団地

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社